

〔倭名類聚抄十五農耕具〕

郭璞方言注云江東杷之無齒者爲杷

音拜、漢語抄、江布利

〔空穂物語、樓の上〕いかゞありしふりし雪のふるまでみたてまつらねばいとわびしけれど、ききのななきそとの給へば、宮は雪をぞ山につくらせ給て、まると二宮とはならべてみ侍しかしとの給まゝ、になき給ぬべければ、ことごとくにまぎらはし給へば、いとくろうつや、かなる御ぞに、うすすはうのからあやの御ほそながにはへて、きよらにいよくうつくしげになりまさり給雪山つくらせ給て、ひゝなあそびなどもにして、みせたてまつり給

〔河海抄九〕應和三年十二月廿日、令右衛門志飛鳥部常則、堆雪作蓬萊山於女房小庭、今日功畢、賜常則及畫所雜色役夫三人祿有差

〔枕草子四〕去はすの十日のほどに、雪いとたかうふりたるを、女房どもなどしてものゝふたにいれつゝ、いとおほく置くを、おなじくは庭に、まことの山をつくらせ侍らんとて、さぶらひめして、おほせ事にてといへば、あつまりてつくるに、殿守司の人にて、御きよめにまいりたるなどもみなよりて、いとたかくつくりなす、宮づかさなどまいりあつまりて、ことくはへことにつくれば、所のまう三四人まいりたる、殿守づかさの人も二十人ばかりになり、けり、里なるさぶらひめしにつかはしなどす、けふ此山つくる人には、ろく給はずべし、雪山にまいらざらん人には、おなじからずとゞめんなどいへば、聞付たるは、まどひまいるもあり、里とをきはえつげやらす、つくりはてつれば、みやづかさめして、きぬ二ゆひとらせて、えんになげ出るを、一つ、とりによりて、をがみつゝ、こしにさして、みなまかでぬ、うへのきぬなどきたるは、かたえさらでかり衣にてぞある、これいつまでありなんと、人々のたまはするに、十餘日はあり、な、此ごろのほどを、ある限申せば、いかにとはせ給へば、む月の十五日までさぶらひなんと申を、御前○藤原に、あまえさはあらじとおぼすめり、女房などはすべて年の内、つごもりまでもあらじとのみ申に、あま